

問一

日本の伝統文化の継承を期待したい現代の若者が、日本の古典芸術には関心をもっていないのに、西欧の古典芸術には理解を示す、倒錯した状況があるということ。

（解答欄 3 行）

問二

伝統を有り難がる態度が断たれ、教養も失われた現代の状況を逆手にとり、むしろ強い気概をもって、因襲から解放された自由な視点で、既存の伝統よりも優れた芸術を新しい伝統として創出していけばよいということ。

（解答欄 4 行）

問三

伝統主義を排する姿勢を保とうとしていたが、伝統とされてきた作品に触れるうち、いつしかそれらがまとう観念的な価値に自らの率直な判断を曇らされていたから。

（解答欄 3 行）

問四

旧来の価値観によって権威づけられた枠組のなかで、教養として「美」を捉え引き継いでいこうとすることの愚かさを弁え、自らの無知を新しい芸術を生み出していくための条件である無垢と捉え直し、何ものにもとられない純粋な直感を信じて芸術に向き合おうとするもの。

（解答欄 5 行）

問一

自分に向けた日記とは異なり、他者に宛てて書く手紙は、言葉の用いようで相手を傷つけかねず、細心の気遣いを払いつつ自らの思いを綴らねばならないということ。

（解答欄 3 行）

問二

普段は苛立ちながらも「ですます形」の型にはまった文章を愚直に紡ごうとしていた「鱒男」が、唐突に切実な心の欲望を直接に表す「出たい」の一言を発したから。

（解答欄 3 行）

問三

一般的な視点から述べる文節と主体の欲望を表す文節との不自然な結びつきが、表現の自明性を揺さぶる不思議な魅力を生み、時空や主体が曖昧になりながらも、かえって話者の本当の気持ちがいかに伝わってくるような感触。

（解答欄 4 行）

問一

誰も来ないような雪の降り積もった朝、実家にわざわざ資盛を訪ねて来てくれたらどんなにか感動するだろうにと、資盛を恋しく思う心情。

（解答欄 3 行）

問二

長い年月が過ぎ去ったものの、記憶の中では資盛の優美な姿がつい先日のことのようなのも、実に困ってしまう。

（解答欄 2 行）

問三

後の運命も知らず、朝顔ははかないと言った資盛と私を、朝顔は、本当に短い盛りのはかない存在だと思っただろう。

（解答欄 2 行）